

403) カブトムシ

近所にある古い神社で縁日が立つというので、夏休みの思い出にと思って、息子と出かけて見ることにした。早めに夕飯を済ませて、何年ぶりかで浴衣などに着替えて来てみると、意外に混んでいて、しかも植木屋さんや、金魚屋さんや、饅頭屋さんや、まあ何処から集まってきたのか、昔ながらの縁日そのもので、息子よりも小生の方が乗せられてしまった。少々不満気な息子に、カブトムシを一つ買い与えると、息子も機嫌を取り直して、意気揚々と引き上げて来た。息子は毎日カブトムシに餌を与えて観察している風であったが、1週間も経つと、「ねーパパ、カブトムシが動かなくなっちゃったの。乾電池取り替えて!」というのである。これにはさすがの小生も二の句が告げなかった。息子もそしてこんな息子を育てた日本社会も、かなり病んでいると思えたのであります。